東京・北京でジャズを聴く

任　哲

　私がジャズを聴くようになったのは二〇〇七年頃であった。大学で助手をしている頃、同じ職場で働く文化人類学の先生に誘われ、秋葉原にあるTokyo TUCというジャズハウスで人生初のジャズライブを聴いた。当日の演奏にはアルト・サックスのBud Shank、トランペットのWarren Vacheをはじめとする豪華なメンバーで、演奏もすばらしかった。これをきっかけに私はすっかりジャズが好きになり、多くのライブハウスを頻繁に出入りした。

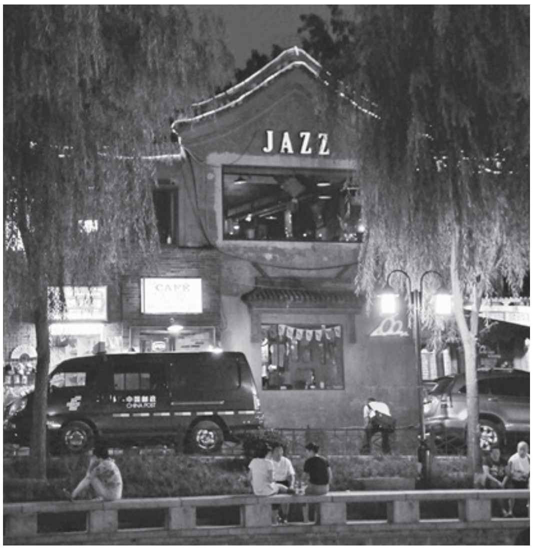
　東京にジャズハウスがどれくらいあるか定かではないが、軽く一〇〇は越えるだろう。アマチュアが集まって練習に励む高田馬場のINTROのようなところもあれば、世界的に有名なジャズミュージシャンが訪れる表参道のBlue Note、丸の内のCotton Clubもある。場所ごとに奏者と客層は様々であるが、共通するところは多い。それはみんながジャズ好きで、音楽を楽しむために集まったのである。多くの人は開演前に席につき、さっさと食事を済ましてから演奏が始まるのを待つ。遅れた人は周りに迷惑をかけないように静かに着席し、飲み物一杯頼んでからすぐ音楽に夢中になる。私はこのような静かにジャズを楽しむ雰囲気が大好きである。ライブを聞く度に中国にはこのような場所がないのかなと期待していた。

　私の期待をさらに膨らませたのが一本の映画である。日中共同制作の映画『夜の上海』のロケ地のひとつがなんと上海市淮海中路にあるCotton Clubであった。ゆったりとして静かな環境で音楽を楽しむ映画のワンシーンがずっと頭のなかに残っていた。中国でもジャズという文化を楽しむ場所がある！二〇〇九年、仕事で北京に滞在する時、私は地元でもっとも有名なジャズハウス—東岸珈琲—を訪れた。聞くところによると、オーナーは中国初のロックスター崔健のバンドのドラマーだったという。東岸珈琲は北京市内の名所である前海に面した小さなジャズハウスで、ロケーションとムードは最高であり、演奏に対する期待も高まった。しかし、演奏が始まった瞬間その期待はどこかに消えてしまった。というのは客同士の雑談の声が大きすぎで演奏が聞こえなかったのだ！

　周りを見渡すと、最前列のテーブルに座った数人を除いて、演奏者に注目している人はほとんどいなかった。演奏中、騒音は低くなっているが、ファーストステージが終わるまで静かな環境でピアノを聞くことが少しもできなかった。静かな環境で音楽を楽しむことを期待していた私にはショックで残念なことであった。ステージが終わると雑談の声はさらに大きくなり、ハードロックを彷彿させた。店を離れる時、いつもこんなにうるさいのかと店のスタッフに聞いた。スタッフは「いつもではないけど、結構うるさい時が多い」という。

　近年、中国で「文化消費」(Culture Consumption)というコンセプトが流行っている。イデオロギー時代のプロパガンダー式文化は徐々に消え、ロック・ジャズといった新しい文化を消費するようになった。また、三大テノールの紫禁城ライブチケットを手に入れた人はカネとコネがある人であるように、文化を消費することは一種の社会的なステータスにもなっている。文化消費が増える一方で、消費文化（Consumer Culture）の問題点が顕著に現れる。ジャズハウスを例に挙げると、ジャズという文化を消費する行為自体は素晴らしいことであるが、ジャズを楽しみに来たのではなく、格好つけてしゃれた場所で飲んで騒ぐことでは文化消費と言えるのであろうか。むしろ、文化消費というよりアルコール消費といったほうがよいだろう。

　二〇一一年、青山ジャズイニシアティブのゲストとして中国から夏佳トリオが招待され、南青山にあるbody & soulでスペシャルライブを行った。夏佳トリオは東岸珈琲で毎週ライブを行っているが、東京のジャズハウスでライブを行うのは初めてであった。ステージが終わってから私は本人に感想を聞いた。「東京の聴衆は本当に音楽を楽しんでいる。静か過ぎてとても緊張したよ」と夏佳は答えた。ジャズという異文化が中国で定着するまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。



にん　てつ／アジア経済研究所　東アジア研究グループ

専門は現代中国政治、博士（国際関係学）。早稲田大学アジア研究機構助手、北海道大学スラブ研究センター研究員を経て現職。